

流山5丁目庚申塔こうしんとう（青面金剛立像しょうめんこんごうりゆうぞう）

名称 庚申塔（石塔・石造物）

全体形状—塔上部が前傾する板状駒型いたじょうこまがた

高さ 1・2m

表面—肉厚ながら細部にわたる彫り、立体感のある造形

裏面—奥行きのある荒彫りあらぼ仕上げ

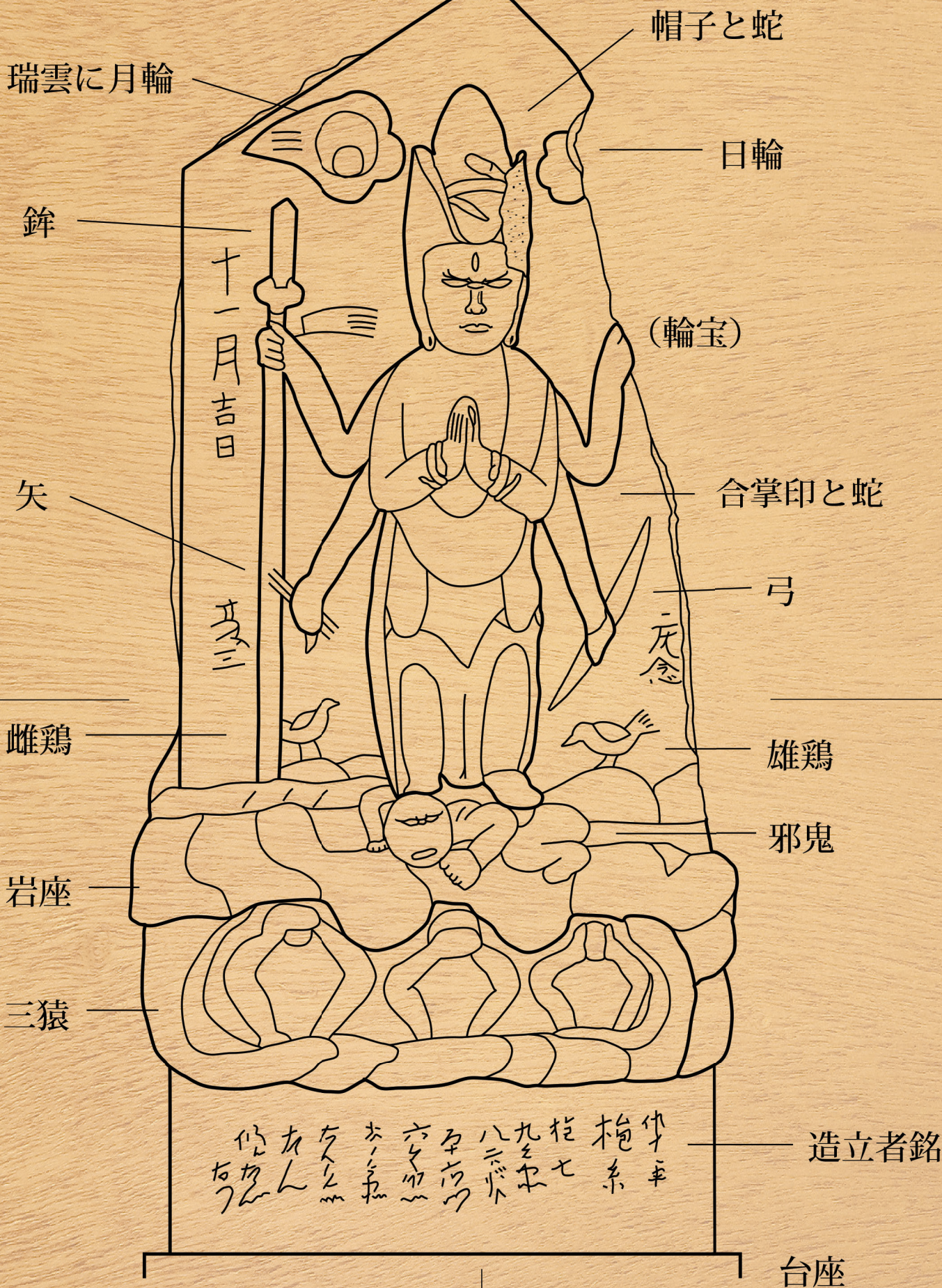
造立年代 塔の右側が欠損しているため詳細は不明であるが、その形状から十八世紀前半の

造立と考えられる。

造立者名 最下段に十二名の名前が刻まれている。詳細は判読不能。

庚申信仰 中国の道教にある「体内さんしにいる三尸の虫が、六十日毎に来る庚申日の夜、人の睡

眠中に天に上り天帝に罪過を告げるとその人の寿命が縮まる」という考えに基づくもので、人々はこれを防ぐため「庚申講」を結び、庚申日の夜は「庚申待」として身を潔めて集まった。庚申の本尊は青面金剛、猿田彦神とされ、庚申待ではこれら尊像の掛軸などを掲げ、飲食や無尽むじんを楽しみ、朝まで眠らないようにして過ごした。庚申塔に夜明けを意味する日・月輪や鶏が彫られているのはこのためである。



0 25cm

流山5丁目庚申塔
 写真トレース図
 令和5年3月

庚申塔概要

江戸時代に盛んになった庚申信仰により建立された石塔。正面中央には信仰の対象の一つである「青面金剛立像」が浮き彫りにされている。

青面金剛は、虎皮の袴と垂を着けた姿で岩座の上の邪鬼を踏みつけ、悪事の封じ込めを体現しているものが一般的であるが、本塔も同様である。

顔は額にも目がある三眼で怒りを表す忿怒ぶんぬの相を呈し、頭部の帽子中央と合掌印を結ぶ両腕には蛇が巻付き、四腕は鉞ほこ・弓・矢・(輪宝)などの武具を携える。

頭部の左右には瑞雲ずいうんに日輪・月輪、足元両側には雌雄一對の鶏が配される。

青面金剛が庚申の「申さる」の字に由来する三猿(見ざる・言わざる・聞かざる)の上に載り、最下段に造立者銘を配置した構成は、典型的な庚申塔の形態である。

庚申塔は、村に邪気が侵入することを防ぐため、村の境目や道の分岐点に建立されることもある。この流山5丁目庚申塔や流山3丁目庚申塔、流山6丁目光明院入口の庚申塔も三ツ辻に面して建立されている。